

あすなろ

東松島市立大曲小学校

学校教育目標『心もからだも健康で 明るく力いっぱい生きる 子どもを育てる』

1000キロを結ぶ夢の絆

大分県書写書道指導者連合会発行の月刊誌『大分県書道』10月号に、大分県書道協会会長牧先生が、大曲小訪問記を寄稿されました。1000キロを結ぶ夢の絆……という、大曲小と大分の地が結ばれていくことに、大きな希望を感じます。曲というタイトルの中に、牧先生の、書に対する熱い思いが強く感じられます。書くことが『生きる力になる』そんな思いを大曲小の子どもたちにも持ってほしいものです。

随想の一部を紹介します。(読みやすいように修正したところがあります。)



『一字が萬字』 「曲」 牧 泰正

8月24日、宮城県東松島市立大曲小学校をたずねた。3.11の震災をきっちり受け止め、この4年半前を向いて、着実に生きている人々の風景や景観に出会った。

○大曲小学校

訪問の目的は、国東半島発の全国夢一文字コンテストに平成25年より応募して、第7回コンテストでは、二年連続団体賞(小学校は3校のみ)、特別賞3名、銅賞1名。全児童290名中98名が応募。被災後なのにその熱心さの根源を確かめたかったのです。

体育館の壁に津波の高さ1.9メートルが印されてある。明後日から第2学期始業を控えての職員会議開始前なのに校長・長沼守康、教頭・坂本忠厚、新田はぎ子の3先生が親しく応対して下さいました。

- ・「こうう時だからこそ、児童が家庭で夢を語り合いながら、形にするとともに、表現力やハガキに触れる習慣づくりを目指している。」と担当の新田先生。
- ・私考案の一時間用練習プリントをご参考にと出し乍ら「もう一つ、日本郵便株式会社の郵便教育推進のための『27年度手紙の書き方』『たのしい夏のお便りをおくろう』のテキストがありますよ」と知らせると「それ活用しています」とのこと。熱意ある人はアンテナも大きい。因みにこの制度を利用すれば、ハガキがついてくるのでとてもお得。近くの郵便局に!!
- ・もう一つ伝達事もあったのです。初回より展示会場を提供して下さいしている大分航空ターミナル株式会社よりの「1000キロを結ぶ夢の絆を作ってゆきたい」との伝言があったのです。第6回コンテスト後のターミナル賞と団体賞受賞の児童と新田先生のお礼状が社長に届き、社長以下社あげて感激。被災に負けない地域と学校に応援したいと「大曲小特別枠をぜひ設けて欲しい」と要望がありました。そこで空港マスコットのマーシャルくんに因んで「マーシャルくん賞」と命名しました。これから東京大阪だけでなく、地方から地方への文化交流をしたいと思っています。それが国東半島あいルネッサンス連盟の本懐なのです。これこそが書写教育の社会に役立つ人間性の汎用に他なりません。文字や言葉を手で書くことは生活でとても大切に便利なことなのです。ずっと堅い交流が続く事をお願いして辞しました。

○何もないとき、最少の用具で何が力となるか。それは手です。伝えたい心を書いて伝えてくれるのは手です。書写書道教育の目指すところは、特別賞でも金賞ではないのです。その結果が大曲小の取り組みや避難所の体育館に貼られた子どもが書いた壁新聞や石巻日日新聞社の社員が震災翌日から書き続けた壁新聞になった時、書写力が生きる力になるのです。そうでなければ、唯の練習となってしまおうと思うのです。

○曲字は象形文字でく、Uのように木や竹を曲げて作った容器をかたどる。ひいて「まげる、まがる」意を表す。大曲小は仙台の母なる大河北上川の支流、定川の湾曲部に抱かれた田畑(以前、今は草地)の中にある。この支流も紆余曲折を繰り返し乍ら作られ続けたことだろう。しかし、川とて被災する。有史以来治山治水は人類の宿縁でもある。自然の前に人間はいつも額衝いてきたのです。……以下略……

がんばりました

読書感想文コンクール石巻地区審査



標記コンクールで、本校から10名の児童が入賞しました。本を読んで自分の感想を書くことも大切です。また、本の内容を話したり、本のことを話題にして話し合うことも読書の楽しみの一つです。秋の夜長、たくさん本を読んで心の栄養をつけましょう。宮城県審査に進む阿部和奏さんの作品を紹介します。



優秀賞	5年	阿部	和奏	「フェアブル」を読んで	県審査作品へ
優良賞	2年	立山	智也	「いつもありがとう いろえんぴつ」を読んで	
入選	1年	門間	瀬愛	「くれよんからの おねがい」をよんで	
〃	2年	車塚	虹奈	「がんばれ 名犬チロリ」を読んで	
〃	3年	斎藤	芽依	「ロックとマック」を読んで	
〃	4年	丸山	芭菜	「かぐやのかご」を読んで	
〃	4年	阿部	直樹	「ぼくはうちゅうじん」を読んで	
〃	5年	柏木	心寧	「赤毛のアン」を読んで	
〃	6年	阿部	春樹	「ちいさな ちいさな」を読んで	
〃	6年	津田	奈美帆	「ちいさな ちいさな」を読んで	

「仕事をしよう。昆虫の本を書き上げるまでは、絶対に死んではいけない。」
この言葉はフェアブルが肺炎にかかり、あと三日生きられるかなと言いきびしい状態の中で自分に言い聞かせた言葉です。すると、だんだん容態が良くなってきました。
どんなに重い病気でも、医者に命が何日もつかわかないと言われても、
「昆虫の本を書き上げるまでは、ぜったいに死んではいけない」
というフェアブルの強い意志はかっこいいと思います。また、苦しい状況にあっても自分の仕事を最後までやりとげようとする姿勢は、決してまねできることではないと思います。深く感動しました。
フェアブルはつねに家計が火の車だったため、一家ははなればなれになり、一四歳で一人ぐらしをするようになりました。
一四歳というと、日本では中学校二年生の歳で、この歳で一人ぐらしをするということにとても驚きました。特にきちんとご飯が食べられるか心配になりました。
私はお父さんとお母さんの働いたお金でご飯を食べさせてもらっています。少ない時に一ぱい。多いときで五はい食べます。ご飯を食べることは私の一日の楽しみだし、生きるために必要なことです。それに比べ、フェアブルの楽しみは、本を読むことでした。自分でこつこつと働いてお金を貯め、ご飯をぬいて買うこともあったと書いてありました。私だったらご飯をぬいてまで好きなことをするなんてできないと思います。

フェアブルを読んで
東松島市立大曲小学校

五年二組 阿部 和奏



フェアブルは、欲のない人で、ディルイ文部大臣がフェアブルのところへたずねてきた時に
「何かほしい道具はありませんか？」
と大臣がたずねたのに対して
「いいえ、何もありません。ちよつと工夫すれば、手元にある道具で間に合います。」と言いました。
ディルイ文部大臣はおどろいて
「君はめずらしい人だね。たいていの人は、あれがほしい、これがほしいと言いつつ立ってるんだが・・・。本当に何もいらないのでですか？」
と聞き返しました。フェアブルは、欲がなくとも意欲がありました。
「昆虫の研究」や「算数の勉強」が大好きだったので、その勉強を生かし、「昆虫記」を書き上げました。知りたいと思ったことを調べ、新たな発見をし、それを文章に書くと言うことは、気力も体力もけずられることでしょう。病気の体で無理をしても作品を完成させる情熱は、すごいなあと思いました。
私もフェアブルのように意欲を持って勉強できるように頑張りたいです。そして、いつか自分が夢中になれることを見つけられるように色々なことに挑戦したいです。
※この感想文は、会話を引き出しながら主人公の生き方についての自分の考えを上手にまとめています。また、本の内容と実際の自分の体験を比較し、フェアブルの生き方を自分を通してよく見つめていくので、本人の思いが伝わってきます。
感想文を書く時には、本の中に出てきた出来事や、主人公の生き方などを自分の心の窓を通して見てみたらどのようになるかを考えてみましょう。それが感想文を書いていくヒントになります。
和奏さんの作品は、最後のまとめ方も、フェアブルから学んだことに自分の夢を重ねているので、生き生きとした感想文になっています。